

日本の地理学会と発展途上国研究

お お と も あ つ し
大 友 篤

- はじめに
- I 日本の地理関連諸学会の現状
 - II 地域研究と地理学との関連
 - III 日本の地理学における発展途上国を対象とする研究の現状
- おわりに

はじめに

「地理学」という学問は名称自体は広く知られているが、地理学の研究者から言わせれば、その内容は一般にはかならずしも正しくは知られていない。一般の人たちは、地理学を中学校や高校の「地理」の延長線上にあるものと理解しているようであるが、それは、地理学の専門分野の一部である「地誌学」の初歩的な応用部分を含んではいるが、地理学の全体ではないのである。地理学は学問のなかでは非常に古い歴史をもっており、古代ギリシャの *geographia* (*geography* の語源) にさかのぼる。現代の地理学の内容は、当然のことながら古代ギリシャの地理学の内容や、18世紀に「自然地理学」を主な内容として再出発し20世紀前半まで続いた地理学（「伝統的地理学」または「古典的地理学」と呼ばれる）の内容とも異なるのである。現在の中学校や高校の「地理」は、どちらかと言えば、この伝統的地理学の内容に近いと言える。

ところで、現代の地理学は、大きく地形学、

気候学、水文学などを含む「自然地理学」と、農業地理学、工業地理学、商業地理学、都市地理学、人口地理学、社会地理学、経済立地論、政治地理学、歴史地理学など多岐にわたる「人文地理学」（両者を合わせて「系統地理学」とも呼ばれる）、および「地誌学」の3大部門に分けられ、さらに補助分野として「地図学」を含んでいる。この分け方は、19世紀の終わりごろ人文地理学が登場し、さらに地誌学が重視されるようになって以来の伝統的地理学の時代から、多くの地理学者によって支持されている専門分野の区分法である。

現代の地理学と伝統的地理学との差異を一言で言うのは困難である。あえて言えば「地域」を一つの個体と考え、その個性を総合的に明らかにしようとするのが伝統的地理学である。それに対して、「地域」を地球表面上の一定の広がり（空間）と考え、その空間上に展開している諸々の事象を総合的に把握するのは困難であるので、それらの一つまたは少数の事象を通して、空間の相互作用や構造などを明らかにしようとするのが現代の地理学である。このように地理学と言っても、伝統的地理学と現代の地理学とでは研究対象とする「地域」の基本理念が異なるのである（注1）。

もちろん、21世紀に近い現在においても、地理学者のなかには伝統的地理学における基本理

念を保持している人もおり、すべての研究者が現代の地理学の基本理念をもっているわけではないことも、追記しておく必要があるだろう。

本稿では、後者の現代の地理学における視点から、日本の地理関連諸学会の現状、地域研究と地理学との関連、および日本の地理学における発展途上国研究の現状を紹介する。

(注1) 例えば、ポール・クラバル著 山本正三・高橋伸夫・手塚章訳『新しい地理学』白水社 1982年。

I 日本の地理関連諸学会の現状

現在、日本における地理学関連の全国的組織をもつ主要な学会は、日本地理学会、人文地理学会、経済地理学会、歴史地理学会、東北地理学会、地理科学学会、日本国際地図学会および日本地理教育学会で、会員の大半は地理学専攻者で占められる。これらのほかに、ある程度の数の地理学専攻者が所属する全国的組織をもつ主要な学会として、自然地理学関連では、日本第四紀学会、日本陸水学会、日本地形学連合、日本火山学会、日本地質学会、日本気象学会、測地学会などがあり、人文地理学関連では、日本地域学会、日本都市学会、日本民俗学会、日本人口学会などがある。また、地誌学関連では、日本アフリカ学会、日本南アジア学会などをあげることができる。そして、3つの専門分野にまたがるものとして、(社)東京地学協会、地理情報システム学会、(社)日本リモート・センシング学会などがある。さらに、主に地理学専攻者で占められる地方的な地理学関連学会は『日本地理学会会員名簿1995』によれば、全国で合計46団体にのぼっている。

これらの地理学関連諸学会のうち最大の組織をもつのは日本地理学会で、1925年に設立され、日本の地理学専攻者の大部分が所属しており、現在の会員数は3000名を大きく超えている。この学会では、年2回、東京と地方において大会を開催しており、自然地理学、人文地理学、地誌学の3分野にわたる研究発表が行われている。また、その機関誌として『地理学評論』(Ser. A)が毎月刊行されているほか、欧文機関誌 *Geographical Review of Japan* (Ser. B) が年2回刊行されている。

日本地理学会に次いで大きな組織をもつのは人文地理学会で、1948年に設立され、現在、会員数は2000名を上回っている。会員の大半は人文地理学の専攻者であり、このことから、日本の地理学研究者の3分の2は人文地理学の専攻者であることがわかる。この学会では、毎年1回の大会を開催しているほか、ほぼ毎月、部門別に研究例会を開催しており、会員の研究交流はむしろ日本地理学会よりも活発である。機関誌として『人文地理』が隔月に刊行されている。

東北地理学会は1947年にもともと地方的な地理学会として設立されたものであるが、現在では全国的な会員組織となり、地理学の全分野にまたがる学会としては日本地理学会に次ぐ規模を有し、現在1000名に近い会員を擁している。年に2回の大会のほか、研究例会をほぼ毎月開催している。機関誌として『季刊地理学』(旧『東北地理』)が設立以来年4回刊行されている。

上記3つの地理学会は日本の代表的な地理学会であり、いずれも機関誌への投稿論文はレフェリーの審査を経て掲載の決定が行われており、掲載論文は日本における地理学研究の代表的な成果と言えるものである。

II 地域研究と地理学との関連

ところで、地理学における発展途上国研究を論じるにあたっては、地理学の1分科である「地誌学」と、それと研究内容としてはきわめて類似した「地域研究」との関係のみておく必要がある。

地誌学はすでに古代ローマ時代にストラボンによって地理学の重要な部門として位置づけられていた。その後、19世紀に人文地理学の誕生とともにその研究成果として地誌の作成が重視されたが、その流れの一部は国状学 (Staaten Kunde) として、後の統計学 (Statistik) の源流のひとつとなった。さらに、20世紀初めにはヘットナーらによって自然地理学と人文地理学の一体化の手段として、地理学の中心的な柱に据えられた^(注1)。20世紀後半には、地誌学は形式的には自然地理学および人文地理学と対等の地位に位置づけられるものの、両者を総合する応用的な側面とみなされるなど、その学問上の地位がいろいろ変動してきた。地誌学の研究対象はいうまでもなく特定の地域である。ある地域に生起する自然的、社会的、文化的、政治的、歴史的な諸事象を体系的に整理し、総合的に記述した地誌を作成するための学問とされるのが地誌学で、地理学者によっては、これを「地域地理学」(regional geography) と呼ぶこともある。

一方、特定の地域における自然的、社会的、文化的、政治的、歴史的な諸事象を体系的に整理し、総合的に研究する学問として「地域研究」(area studies) と呼ばれる分野が20世紀後半あたりから登場していることは周知のとおりであり、むしろ最近においては、地誌学よりも知名度が

高い学問となっているようである。特定の地域に関する総合的な研究分野として古い時代から地誌学が存在しているのに、なぜ、地域研究が地誌学とは別個の独立した学問分野として成立しているのであろうか。直接的な契機は、第2次世界大戦時にアメリカ政府が戦略研究の一環として対戦国の政治、自然、社会、経済、文化などに関する詳細な情報収集や分析の仕事を中心として地誌学の専門家に依頼して開始したことにある^(注2)。

しかし、地誌学者は、その国の諸事象に関する広い知識はあるが、それぞれの個別事象については浅い知識しかもたないために、対戦国のそれぞれの事象に詳しい地理学以外の学問分野の専門家に仕事を委嘱しはじめ、個別の事象に関する専門的方法論をもたない地誌学者はしだいにこの分野から遠ざかり、あるいは遠ざけられるようになった。

第2次世界大戦終了時には、いわゆる地域研究に携わる者の大半は、特定の地域に興味をもつ、もともと歴史学、文学、政治学、文化人類学、社会学、経済学など地理学以外の専門分野の研究者で占められることになった。地理学の研究者がいわゆる地域研究にあまり参加していないのは、当時、地理学の分野では、従来の地誌を重視した伝統的地理学からかならずしも地誌を重視しない現代地理学へと学問の潮流が変化したことや、いわゆる地域研究の流れが、地域の個性を明らかにするというような、かつて伝統的地理学においてとりあげられ、現在では過去のものとなっている課題に関心が向いて、過去に地理学ないし地誌学がたどった同じ道筋を歩いている感があることから、現代地理学研究の基本理念には合わない、などといった理由

があげられよう。

一方、地域研究の側からみれば、特定地域に関する総合的な学際研究を行うにあたって、地理学、とくに地誌学に何を期待できるのかが不明で、協力を求めようがないということがあげられよう。現代地理学の立場では、この点に関しては明快で、後述するように、空間的視点の導入によって貢献できるといえるのであるが、他分野の地域研究者は現代地理学に関する十分な知識をもたないので、この点について、理解が十分になされていないように思われる。

しかし、近年、地理学とくに地誌学の側から、発展途上国研究を足がかりとして地域研究への接近の動き^(注3)がみられ始めており、地域研究者と地理学研究者との間の交流の動きが認められる^(注4)。

(注1) 西川治『地球時代の地理学思想——フンボルト精神の展開——』古今書院 1988年 60～66ページ。

(注2) 西川治『人文地理学入門』東京大学出版会 1985年 45ページ。

(注3) 熊谷圭知「第三世界の地域研究と地誌学」(『地誌研年報5』広島大学総合地誌研究資料センター 1996年3月) 35～45ページ。

(注4) 「<シンポジウム特集>地誌学とエリアスタディー——現状と課題——」(『地誌研年報5』広島大学総合地誌研究資料センター 1996年3月)。

III 日本の地理学における発展途上国を対象とする研究の現状

したがって、このような地誌をかならずしも重視しない方向への地理学における潮流の変化が日本の地理学にも影響を与えたことと、第2次世界大戦後20年以上にわたって海外への渡航制限があったため、海外の特定地域に興味をもってフィールド・サーベイが不可能であった

ことなどの理由で、この間、日本の地理学における海外研究、とくに発展途上国を対象とする研究には見るべき業績は認められないと言ってよい。日本の地理学における海外研究、とくに発展途上国を対象とする研究が再開されるのは、地域研究が盛んになりはじめた1980年代以降のことである。本稿末尾に付した文献は、前記の日本における主要な3つの地理学会の各機関誌に1980年以降掲載された発展途上国を対象地域とする研究の成果である。

これによれば、この約17年間に掲載された関連論文数は、『地理学評論』(欧文版を含む、以下同じ)には63編、『人文地理』には34編、『季刊地理学』には21編、合計118編である。年平均では、『地理学評論』が3.7編、『人文地理』が2.0編、『季刊地理学』が1.2編、全体では約7編ということになる。年間の掲載論文総数は、『地理学評論』が約50編、『人文地理』が約25編、『季刊地理学』が約15編、全体では約90編と推計されるので、発展途上国を対象地域とする論文数は全体の10%に満たない状況にある。分野別には、『地理学評論』では、自然地理学関連が40編、人文地理学関連が23編、『人文地理』では、人文地理学関連のみ34編、『季刊地理学』では、自然地理学関連が7編、人文地理学関連が14編で、全体では、自然地理学関連が47編、人文地理学関連が71編で、地誌学関連は皆無である。これは、日本における現在の地理学の研究動向をほぼ反映したものと言える。

研究対象地域別にみると、全体では、韓国、中国およびモンゴルを含む東アジアが70編、その他のアジアが28編、アフリカが7編、ラテンアメリカが8編、複数の地域にまたがるもの5編で、アジア地域を対象とするものが8割をこ

えている。なかでも東アジア、とくに韓国を対象地域とするものが圧倒的に多い。執筆者のなかには外国人も含まれており、その数（共著の場合には筆頭者）は全体で34名で、ここでも韓国の比重が圧倒的に大きい。

人文地理学関連のものの内容については、発展途上国研究という視点が明白なものは、Hagiwara (1989) の論文のみであり、他の多くは、先進国においてすでに適用されている理論や方法を発展途上国に適用するという形のものである。また、分野では都市地理学的なものが多く、次いで地域研究でも比較的多い農業地理学的なものとなっている。

おわりに

以上のように日本の地理学における発展途上国を対象とする研究の多くは東アジア地域に偏しており、また、発展途上国研究という視点がかならずしも明白であるとは言いがたい面が認められる。さらに、いわゆる地域研究におけるような総合的な研究は少ない。もちろん、前記の3学会の機関誌には部分的な報告(Fujiwara and Nakayama [1985], 藤原・貞方 [1988] など)しか発表されていないが、広島大学におけるようなインドに関する地誌学的な総合研究の例もあり、皆無ではない。

いずれにせよ、今後地理学が発展途上国に関する研究において貢献できるのは、これまで地域研究のなかで欠けていた空間的相互作用や空間構造などの空間的視点とそれに基づく理論研究を導入するところにあると考えられる。しかし、従来の地域研究者にはこのことがまだ理解されていないように見えるので、そのためには

今後地域研究の研究者と地理学研究者との間での密接な研究交流が必要と思われる。

< 関連論文一覧 >

『地理学評論』(欧文版 [Ser. B] を含む)

<1980年>

曹華龍「韓国東海岸における完新世の海面水準変動」(53): 317-328。

<1981年>

南築佑「ソウルにおける結節地域の構造とその特性——日々人口流動からみた——」(54): 637-658

<1982年>

朱京植「韓国の都市化と都市システム 1960年-1980年(1)」(55): 1-20。

吉村稔「モンスーンアジアの夏季降水量の変動と総観場の変動」(55): 223-238。

田京淑「韓国忠清北道地域における生活圏および定期市の変容に関する研究」(55): 292-312

<1983年>

田京淑「韓国忠清北道地域における中心地システムの変容に関する研究」(56): 471-490。

江口卓「インドネシアの降水量分布と気流系」(56): 151-170。

<1984年>

松本淳「東アジアにおける夏季の気流系について」(57): 137-155。

岩崎一孝「7月における華中の多雨・少雨に関する原因についての研究」(57): 369-383。

吉野正敏・千葉長「降水量とその年変化型による中国の地域区分」(57): 583-590。

<1985年>

篠田雅人「アフリカ南東岸域における流路の状態変化と段丘形成について」(58): 135-154

山下清海「シンガポールにおける華人方言集団のすみわけとその崩壊」(58): 295-317。

太田 勇「マレーシア、シンガポールの言語環境と華語社会」(58): 318-339。

Mario Hiroya, "Floodplain Farming in the Per-

- uvian Amazon" (58B) : 1-23.
- Hiroshi Morikawa and Jun-Yong Sung, "Central Places and Periodic Markets in the South-eastern Part of the Surrounding Area of Seoul" (58B) : 95-114.
- Isamu Ota, "Recent Changes in the Chinese-speaking Environment of Singapore" (58B) : 115-129.
- Kenzo Fujiwara and Shuichi Nakayama, "Rural Development in the Drought Prone Areas of South Deccan Plateau in India" (58B) : 130-148.
- Masatomo Umetsu, "Natural Levees and Landform Evolutions in the Bengal Lowland" (58B) : 149-164.
- <1986年>
- 梅本亨「東アジアにおける大規模寒波モデル」(59) : 1-17。
- 金萬亭「韓国洛東江の河道特性」(59) : 307-317。
- 朴恵淑「ソウル市およびその周辺地域における夏季のヒートアイランドの気候学的考察」(59) : 684-705。
- Tokuji Chiba, "Soil Erosion and Systems of Cultivation in Middle and South China : Especially Related to Maize Cultivation" (59B) : 21-30.
- <1987年>
- 高橋日出男「東アジアにおける梅雨季の水蒸気輸送パターンと水蒸気分布の季節推移」(60) : 1-19。
- 朴恵淑「日本と韓国の諸都市における都市規模とヒートアイランド強度」(60) : 238-250。
- Testuo Satoh, "Wet-rice Cultivation in Lowland Bangladesh" (60B) : 117-133.
- Masanori Naito, "Crisis of Kufrayu Village in the Oasis of Damascus : Spatial Configuration under the Process of National Integration" (60B) : 134-163.
- Masatomo Umetsu, "Late Quaternary Sedimentary Environment and Landform Evolution in the Bengal Lowland" (60B) : 164-178.
- <1988年>
- 田中実「熱帯地域における最近の気候変動と乾燥化」(61) : 104-112。
- 後藤晃「『西アジア農法』について——乾燥地における伝統的農業の技術的適応——」(61) : 113-123。
- 藤原健蔵・貞方洋「南インド半乾燥地域における農村開発と土地利用の変化」(61) : 143-154。
- 田村俊和「カメルーン中、西部の高地にみられるサバナ化の歴史」(61) : 170-185。
- 河野通博「中国にみられる砂漠化とその防治についての覚書」(61) : 186-197。
- 山川修治「東アジアにみられる卓越気圧配置型の季節推移からみた近年の気候変動」(61) : 381-403。
- 川村隆一「東アジアの冬季モンスーン活動と西部太平洋の海面水温との相互作用」(61) : 469-484。
- 菅野洋光「東アジアにおける梅雨期の寒帯気団」(61) : 615-631。
- Shigeru Shirasaka, "The Agricultural Development of Hill Stations in Tropical Asia : A Case Study in the Cameron Highlands, Malaysia" (61B) : 191-211.
- Abdul Samad Mohamed Nawfal, "The Spatial Perspective of Ethnic Residential Patterns of Kandy City, Sri Lanka" (61B) : 225-247.
- <1989年>
- 金谷年展「冬季のユーラシア大陸上における異なった天候レジーム間の遷移過程」(62) : 547-565。
- 高橋日出男「梅雨期の中国大陸上における降水帯の形成過程と前線構造」(62) : 853-876。
- 高橋春成「再野生化ブタの分布と発生過程」(62) : 513-537。
- 矢澤大二「いわゆるバンバ問題について」(62) : 389-408。
- Hachiro Hagiwara, "A Comparative Study of Metropolitan Water Supply and Drainage Systems in Developed and Developing Countries : The Cases of Tokyo, Mexico City, Paris and Sao Paulo" (62B) : 86-103.
- Wei-dong Xu, Shigeru Shirasaka, and Takeo Ichi-

- kawa, "Farming System and Settlements in Xishuangbanna, Yunnan Province, China" (62 B) : 104-115.
- Hajime Makita and Hiroyuki Chujo, "Vegetation of Yunnan and Hainan Provinces, China" (62 B) : 116-126.
- Kazuko Urushibara-Yoshino and Shizuo Nagatsuka, "Climatic Conditions and Vertical Zonality of Soil Distribution in South Yunnan, China" (62B) : 127-136.
- Seiki Nomoto, Mingyuan Du, and Ken'ichi Ueno, "Some Characteristics of Cold Air Lakes and Fog in the Jinghong and Mengyang Basins, Xishuangbanna, China" (62B) : 137-148.
- Masatoshi Yoshino, "Problems in Climates and Agroclimates for Mountain Developments in Xishuangbanna, South Yunnan, China" (62B) : 149-160.
- Tetsuzo Yasunari and Shaofen Tian, "Large-Scale Atmospheric Circulation Patterns Associated with the Cold Surges in Yunnan Province, China" (62B) : 161-169.
- Shizuo Nagatsuka and Kazuko Urushibara-Yoshino, "On the Relationship between Climate and Soil in Hainan Island, China" (62B) : 170-178.
- Hidenori Takahashi and Kiyotaka Nakagawa, "Micrometeorological Characteristics of a Rubber Plantation on Hainan Island, China" (62B) : 179-191.
<1990年>
- 東村康文「19世紀前半にみられた東アジアにおける夏季の寒帯前線帯の南偏」(63) : 577-592.
- Makki Muhammad Aziz, "Spatial Patterns of Exogeneous Mortality in Kuwait" (63B) : 188-196.
<1991年>
- 菅野洋光「ユーラシア大陸東部中高緯度における気団の季節変化」(64) : 225-243.
- 高橋日出男「中国大陸上における梅雨季の降水帯形成に關与する低温域の移動と循環系」(64) : 697-716.
- Shuhei Shimada, "Economic Change and Labor Migration in Rural Nigeria" (64B) : 79-97.
<1992年>
- 矢ヶ崎隆・斎藤功「ブラジル北東ゴイアナ川流域における製糖工場の展開とサトウキビ集荷圏の空間組織」(65) : 17-39.
- Kazutaka Nakano and Syabbuddin, "Dynamics of Land Use of an Equatorial Highland in West Sumatra" (65B) : 90-103.
<1993年>
- 鄭光中「韓国金浦半島における薬用人参生産の地域的展開」(66) : 1-25.
- 池谷和信「ナイジェリアにおけるフルベ族の移牧と牧畜経済」(66) : 365-382.
- 三富正隆「台湾蘭嶼ヤミ(Yami)族における空間認識と世界観の変容」(66) : 439-459.
- Shizue Kamikihara, "Agriculture and Transnational Corporations in the Bajio Region, Mexico" (66B) : 35-51.
<1994年>
- Eiji Matsumoto, "Degradation of Tropical Geoecosystems and Formation of White Sand in Northeast Brazil" (67B) : 50-62.
<1996年>
- 北田晃司「植民地時代の朝鮮の主要都市における中枢管理機能の立地と都市の類型」(69) : 651-669.
- 西森基貴・安成哲三「東アジア太平洋地域における地上気圧場の長期的変動」(69) : 793-816.
- 『人文地理』
<1980年>
- 小林致広「アステカ期メキシコ盆地の領域構造」(32) : 97-121.
- 石原潤「華中東部における明・清・民国時代の伝統的市(market)について」(32) : 193-213.
<1981年>
- 中島健一「エジプトにおける農耕家畜の起源」(33)

- : 23-40。
 <1982年>
 韓柱成「韓国における旅客流動の地域構造」(34): 481-502。
 <1983年>
 阿部治平「チベット高原の農牧業分布と最近の動向」(35): 139-154。
 利光有紀「‘オトル’ ノート——モンゴルの移動牧畜をめぐって——」(35): 548-559。
 <1984年>
 小林致広「ワマン・ポーマのマバ・ムンディ——アンドレス社会の土着的世界像の分析」(36): 193-214。
 <1985年>
 岡田俊裕「飯塚浩二のアジア論——その戦中・戦後——」(37): 374-384。
 辻 稜三「韓国大邱市の市場における Mook (ドングリ加工食品) の流通」(37): 374-384。
 金坂清則「トルコにおける給水事情と給水事業——村落地域の場合——」(37): 422-455。
 <1986年>
 応地利明「デカン高原南端部における定期市の規範的検討」(38): 289-315。
 中山修一「インドにおける都市研究の展開——インド人研究者の成果を中心として——」(38): 147-315
 <1987年>
 水野 勲「定期市の市日配置のシミュレーション・モデル——韓国忠清南道の定期市を例に——」(39): 487-504。
 尹正淑「仁川における民族別居住地分離に関する研究」(39): 279-293。
 <1989年>
 島田周平「70年代以降ナイジェリアの農村社会変容の一断面——労働力移動にみるエビヤ村の事例から——」(41): 319-341。
 河野通博「中国における人文地理学の復活」(41): 45-70。
 <1990年>
 許衛東「中国海南島における農業の変貌と地域分化」(42): 195-219。
 高橋誠一「東アジアの都城遺跡」(42): 442-465。
 <1991年>
 渋谷鎮明「李朝邑集落にみる風水地理説の影響」(43): 5-25。
 柴彦偉「中国都市の内部地域構造——蘭州市を例として——」(43): 526-545。
 金松美「韓国光州市における消費者の購買地選択行動と個人特性との関係」(43): 166-180。
 森日出樹「インド西ベンガル州エビ養殖と稚エビ漁」(43): 583-596。
 <1992年>
 上野和彦「中国郷鎮企業の存在形態」(44): 242-261。
 田和正孝「マレー半島西海岸の商業的漁業地区における漁場利用形態——ジョホール州パリジャワの事例——」(44): 507-523。
 安食和宏・宮城豊彦「フィリピンにおけるマングローブ林開発と養殖池の拡大について」(44): 620-633。
 <1993年>
 村松嘉久「中国における少数民族政策の展開——雲南省を事例として——」(45): 491-514。
 韓柱成「韓国における路線トラック網の形成過程」(45): 311-323。
 <1994年>
 月原俊博「有畜農業と家畜種——インド、ラダックの農-牧連関——」(46): 1-21。
 徐培璋・斎藤光格「北京市の衛星都市とその問題」(46): 642-657。
 <1995年>
 金科哲「韓国における農山村の人口に関する研究の動向と課題」(47): 21-45。
 瀬川真平「国民国家を見せる——『うつくしいインドネシア・ミニ公園』における図案・立地・読みの専有」(47): 215-236。
 木本浩一「植民期インドにおける「王侯都市」の形

- 成——マイソール (Mysore) を事例として——」(47) : 357-378。
 内藤嘉昭 「シンガポールにおける人口構成と観光特性」(47) : 501-511。
 <1996年>
 遠藤元 「タイ地方経済研究の潮流と問題点——地方実業家をめぐる議論を中心に——」(48) : 447-467。
 <1997年>
 朴侏玄 「国際物流の移動プロセスからみた釜山企業の対日輸出行動——食品・衣服業種における取引行動を事例に——」(49) : 142-158。
 『季刊地理学』(旧『東北地理』)
 <1980年>
 朱京植 「ソウル市における人口密度の地域傾向面分析」(32) : 26-34。
 島田周平 「ナイジェリアの国境線確定過程」(32) : 157-163。
 <1981年>
 韓柱成 「韓国における鉄道貨物流動の地域構造」(33) : 22-34。
 <1982年>
 南榮佑 「パーソントリップからみた韓国首都圏の地域構造——1977年と1991年の比較——」(34) : 125-137。
 韓柱成 「韓国における自動車貨物流動の空間的パターンとその変化」(34) : 213-223。
 伊藤悟・南榮佑 「空間的相互作用モデルにおける距離パラメータの地域パターンおよびそれに関連する社会・経済的特性——ソウルの事例——」(34) : 236-245。
 <1983年>
 金在光 「韓国家畜市場の機能と市場圏」(35) : 99-109。
 <1984年>
 大津高・加藤武雄・曹晴賢・張萬福 「南部台湾高山湖『巴油池』の概況」(36) : 247-256。
 <1985年>
 曹華龍 「韓国洛東江下流沖積平野の地形発達」(37) : 29-42。
 <1988年>
 韓柱成 「韓国における石油製品流通の空間的形態」(40) : 15-30。
 鄭還泳 「韓国の人口減少農村における人口構造と移動メカニズム——忠清北道清原郡の3村落の事例——」(40) : 31-39。
 大津高・呂勝由・加藤武雄・張萬福・大竹直・蔡百峻 「他羅瑪琳池周辺の陸水学的・生物学的概況」(40) : 258-271。
 <1989年>
 陳忠暖 「中国雲南省安寧県における大規模工業開発と地域社会の二元構造」(41) : 201-212。
 韓柱成 「人口移動からみた韓国の都市群システム」(41) : 213-224。
 <1992年>
 韓柱成 「韓国における小売業販売活動の空間的変容」(44) : 37-47。
 古谷尊彦・阿子島功 「モンゴル北東部ビンデル付近の形成中のアースハンモックについて」(44) : 101-106。
 韓柱成 「韓国忠清北道における市外バス事業体の路線網と競合の形態」(44) : 115-128。
 大津高・曹晴賢・水野寿彦・佐藤五郎 「台湾太平山翠峰湖の陸水学的概況」(44) : 129-131。
 <1993年>
 崔成吉 「韓国東海岸珠樹川流域における後期更新世の河成段丘の対比と編年」(45) : 155-166。
 <1996年>
 黒木貴一・赤桐毅一 「『原単位法』を用いた海面上昇の社会経済的影響予測——バンコク地域の事例——」(48) : 161-178。
 <1997年>
 Teiji Watanabe, "Estimates of the Number of Visitors Impacting Forest Resources in the National Parks of the Nepal Himalaya" (49) : 15-29。
 (日本女子大学人間社会学部教授)